探訪

探検ロマンより 戸穴荘を訪ねて

吉田勝重
（会員　佐伯市女島）

昨年の六月十四日、戸穴地区を訪問した。

戸穴地区はその昔穂戸郷と呼ばれていたと考えられている。豊後風土記（定本）には「海部郡　郷肆所（里一十二）驛壱所　烽弐所　此郡百姓並海邊白水郎也。因曰海部郡」とあり、人々は海人であったという。また、別の項には「昔者、纒向日代宮御宇天皇御船、泊於此門、海底多生海藻而長美。天皇即勅曰、取最勝海藻（謂保都米）便令以進御。因曰最勝海藻門。今謂穂門者訛也。」と書かれている。景行天皇が取らせたこの海藻は最勝海藻と呼ばれ、これが穂戸になったと伝えられている。上浦の最勝海の文字と重なる。穂門＝穂戸郷＝戸穴と考える。

語源から見ても穂門＝火窪（当時の製鉄炉）＝火穴＝戸穴と変化したものと考えられている。

この穂戸郷の荘園を戸穴荘という。軍事目的で佐伯部や官倉「佐伯院」が設置されたが、天慶四年（九四一）の藤原純友の乱の時、合戦の場となった。この佐伯院と戸穴荘が同一のものかはわからないが、鎌倉時代には荘園の保護のため京都八条院の智恵光院領（皇室の私領）として付け出され、地頭職を安堵されている。

私たちは、この戸穴の史蹟、河波ケ城城址、河内城、彦宮三柱神社、萬休院、願成寺、緒方家の祠、野々下右馬允の供養塔等を訪問した。

一、河波ケ城跡と加久良大明神

この城は、佐伯市狩生字中河原にある標高一八三mの山上にある山城で、南北朝時代の康永二年（一三四三）に、この土地を領していた大友氏の臣、上杉弾正家隆の籠った城砦と伝えられているが詳細は不明である。おそらく、永享年間（一四二九～一四四一）の大友氏と大内氏の戦い、姫嶽合戦での大友持直方の武

河波ケ城址と加久良大明神社跡付近

将の城砦ではなかったかと推測されている。（日本城郭体系・大分）

彦山系の支峰に属し、その山頂に上杉大権現の石祠があり、上杉氏の祖先廟と伝えられている。河波ケ城址の斜め右下の杉林の奥には「加久良大明神」の祠、五輪塔があるという。

この狩生には、御所浦という地名がある。南北朝時代、御醍醐天皇の皇子懐良親王が征西将軍として九州に下り、建武の新政以後の南朝回復を計ろうとした。その時九州に上陸した場所が県南であったという。この加久良大明神跡の五輪塔はこの事と関連があるのだろうか。

「加久良」という言葉を調べて見ると、宮崎県の串間にある山幸彦の神社の謂れ（神話）に「狩倉（＝加久良・御狩神事）」という言葉がある。

また中世から近世の日本において、「武家の棟梁が狩猟や騎射の場として管理した山野の事」と書かれていた。更に荘園の地主領主が荘園内や公領の一部の山野を占拠し、軍事訓練として使用していたともいう。そこには「狩倉の定」（＝十二月十三日から翌年正月の

はじめの酉、丑、辰、申、五日の日に神事を行う）というものがあり、狩りから無事に帰ってくる人を祝って、それぞれの地区から酒を持って集まるという。この行事は「御酒迎（さかむかえ）」と呼ばれている。

二、緒方三郎惟栄の祠（狩生・野々下家の墓地）

この河波ケ城の前の道を進むと、カサ（神・上）、高（こう）蘇（そ）地区に至る。いくつもの石塔や五輪塔が見受けられる。高蘇地区は、その名の通り紙を作る「楮（こうぞ）」を生産していたという。

住宅の路地裏の小道を上った所に「緒方三郎惟栄の祠」がある。

この祠は狩生村の庄屋野々下治良兵衛が寛永十五寅年一月二十五日に建立したものである。

祠の中の石、緑泥片岩には次のような文字が刻まれている。

「大神大太惟基五代孫緒方三郎惟栄後裔　祖母嶽之野々下伊賀守惟是　正流廿一代於栂牟礼城主佐伯薩摩守大神朝臣惟治大永七亥年七月廿五日　宝永十五寅年一月廿五日本家代御先祖祭　大神姓野々下治良兵衛　同弟分家　利兵衛　同弟城真」と書かれている。

この祠の左右に「祖母嶽大明神」「富之尾大権現」「野々下大明神」の三つの小さな石塔がある。

この野々下治良兵衛の墓地を過ぎ、さらに上ると江戸時代のお墓が点在する。大半は山より平地に降ろし新たに供養されており若干の墓石が残されていた。

江戸時代のこれらの墓碑は山の斜面を平らに開いた場所に作られていた。

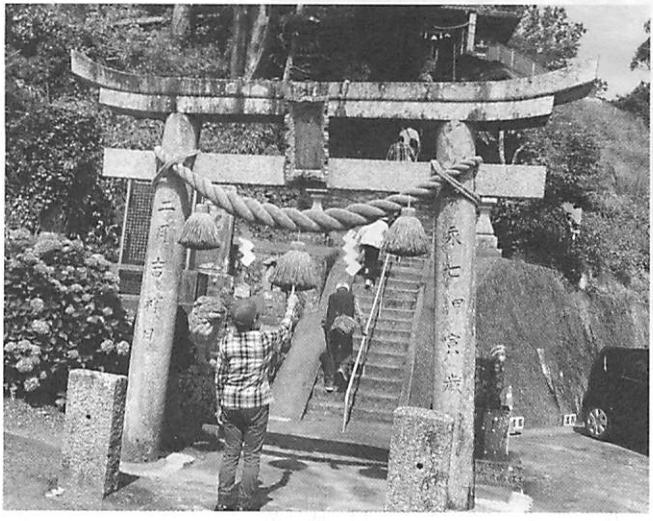
戒名と年代を見ると妙光信女（明和七年寅年三月

十三日）、皈真（きしん）・自閉禅定門（五月三日・俗名文四良）、回皈　道空信士（宝暦七巳年正月晦日）とあった。六基の内三基は年代や氏名があったが他の三基は丸い石が置かれているだけだった。

この山には他にも五輪塔などが点在していた。五輪塔には、名前や記号等なく時代は形から推測するしかない。また明治以降の開発により元の場所から動かされたり、上、下が入れ替わっているものもあった。

三、彦宮三柱神社（宮野内）

次に私たちが訪れたのは、宮野内地区にある彦宮三柱神社である。宮之内地区の日豊線ガード下を潜った先にあった。



宮野内は、旧藩時代に上浦村に属していたが、この地には「彦宮三所権現」（彦宮三柱神社）があり古くから尊崇の対象となっていた。

里の諺（ことわざ）によると「北側に大山があって、昔、豊前の英彦山の神がこの山に現れたので、以来『彦岳』と名付けたという。

また海上に小島があって、その北壁に神が飛び移った。それでこの島を『彦島』というと。

この神は、とても霊感が強く、往来する船を度々転覆させた。そこで漁民が相集まり話し合って、浦の高い所に宮を建て『彦宮三所権現』と称し尊崇することにしたという。この事は彦宮三所権現の棟札に記載されている。さらに彦岳山頂の彦岳神社には、寛文元年（一六六一）辛丑正月二十八日、緒方姓入内先祖野々下治郎兵衛が寄進した祠がある。

この神社の入り口には、その由緒書が記念碑として建てられている。鳥居には嘉永七甲寅歳二月吉祥日の銘が彫られている。上の境内には本殿の他に、恵比寿社などの社や常夜燈などがある。宮野内庄屋亀山又兵衛の名も見える。

このお宮の境内から左手、狩生側の平頭鼻（ひょうどうばな）には天慶の乱の時、死者が多く打ち寄せたという話も伝わっている。

四、願成寺と萬休院

次に訪問したのは本正山願成寺（臨済宗妙心寺派・養賢寺末）と萬休庵である。願成寺は創建年代は不明で、旧記には「往年焼失し、中絶年久く、草創の始め考えふるに難し」とある。一説には寛永八年（一六三一）五月の創始とし、文政十二年（一八二九）に再建されたという。

お寺の人の話では、今から四百年前に建てられたものであると言っていた。屋根の上が二層になっており瓦は三層重ねという。本堂の屋根の中央には桐の紋が描かれている。非常に豪勢で立派な佇まいの寺である。

このお寺の左側には、萬休院という古刹がある。この萬休院は、享保十九年（一七三四）願成寺五世隠居仁叟原恕（じんそうげんちょ）が、古来の一札を持って藩に願いだし養賢寺の末寺として戸穴村願成寺の住持となった時、堅田城村にあったものを戸穴村平野に移したものである。古来の一札とは、佐伯惟治が母の菩提を弔うために、栂牟礼城下の萬休院住職にあてた寄進状である。仁叟原恕は、佐伯管内の神職を勤めた柴田氏の出身で故事来歴に詳しく、管内社寺の由来や墓碑銘などを依頼されて多くを残している。

萬休院の裏山は、かって河内城と呼ばれた砦の後で、周辺には五丁、船倉、引地、的場、仮屋、馬場、紺屋、按察使、阿弥陀堂などの古い地名が残されている。

境内の一隅に「一字一石一字三札二十有偏　宝篋印塔　歓誉喜雲信士　万休老人恕仁叟謹拝書並鐫…」と書かれた宝篋印塔があるという。

その他にも寺の境内には五輪塔などがある。年代が書かれていない。

五、野々下右馬之允の墓

訪問地の最後は、佐伯市狩生にある野々下家の墓「野々下右馬之允の墓」である。

野々下右馬之允は、大友義鑑と佐伯惟治の栂牟礼城攻防戦に関わり、主佐伯惟治とともに日州尾高智にて戦死したものである。佐伯惟治の日向落ちに参加した武将は「栂牟礼実録」に二十名の武将名が載っている。そのうち、泥谷将監は主の戦死の様子を堅田に知らせ

子息千代鶴君と共に自刃している。

ここにいう野々下右馬之允は、尾高智の戦いで餅原監物、坂下弾正と共に最後まで戦い戦死したという。この野々下右馬之允の墓が大正十四年（一九二五）に、宇目から地元狩生に移され山田庵住職が縁起として書き残している。

山田庵住職の布衣三岳謹書の「縁起」を紹介する。

縁起

謹ンデ按ズルニ我野々下家ノ祖先ハ人皇四十二代桓武天皇ノ御宇堀川経基豊後ニ配流セラレ其時明毅仮現シテ惟基ヲ生ム時シ五十二代嵯峨天皇弘仁二年辛卯三月五日ニシテ惟基豊後ノ守ニ任セラル其妻肥後菊池武之ノ女ナリ故ニ大神氏祖母嶽明神ノ御子ナリ其孫惟治及ビ惟義父ノ官位ヲ襲ヒ源氏ニ属シ時ニ平氏安徳天皇西行ニシテ豊前ニ行啓遊バサレ宇佐ニ留マル惟義故アリテ兵ヲ率イテ之レヲ遂フ其兵火ヲ宇佐神官ニ放ツ神主大ニ憤リ之レヲ源頼朝ニ訴フ頼朝惟義ガ官位ヲ剥奪シテ国ヲ大友能直ニ與フ時ニ建久七年正月能直下向スルヲ以テ惟義思フニ豊後ノ国ハ我父母ノ国ナリ我等ノ墳墓ノ地ナリ今ヤ空シク他人ノ為メニ略奪セラルルニ會フ惟義大イニ憤リ大友能直ト戦フ克タズシテ戦死スルモノアリ或ハ其一族諸国ニ流散スルモノアレトモ其大半ハ大友氏ニ属ス七代惟秀ノ五代タル伊賀ノ守惟持姓ヲ野々下ト呼ビ子孫世々縣下大野郡三重郷宇目字伏野ニ住スト而シテ吾祖先ノ第五孫タル野々下惟善孫八郎事惟治公ニ従ヒ栂牟礼城ニ至リ大永七年臼杵長景ト戦ヒ遂ニ勝タズシテ流散セラレタル由伝説アリ依テ此惟義孫八郎氏海崎村ニ遁レ居住シ天文七年馬之亟ト改名セリト云フ是レ則チ吾等カ祖先ナリ後チ村内五六ノ分家アリ今ヨリ以往祖先ノ英霊ヲ祭祀センガ為メ大正十三

年晩秋野々下民蔵笠村茂作野々下浅五郎ノ三氏氏子一同ト相謀リ筆ヲ伝説古書ニ求メ百方力ヲ尽シ右採録シテ縁起トナシ之ヲ後世祭ラシムルト再云之レヲ祭ラバ村内ハ繁栄シ子孫ハ無事息災ナリト決シテ疑心アルベカラズ

右祖先馬之亟ノ祭日ハ旧十月二十七日トス
氏神ハ富ノ尾神社也　右　氏子一同
大正十四年旧三月如意宝珠日誌
山田庵住職　布衣三岳謹書

六、最後に

このようにして今回の「歴史ロマン探検隊」は終了した。その帰り道、海崎中野地区にある「寺屋敷古塔群」を訪問した。その昔、史談会が作った説明版（平成三年作）が朽ち果て傾きながら立っていた。道路の右側、萱の藪をかき分けた所にそれはあった。そこには五輪塔、板碑、円塔が七十五基以上あった。この付近には寺屋敷があり、寺は山田庵に移したという。五輪塔の中には「圓宵喜山妙慶大姉菩提」と墨で書かれた石塔があった。

このように海崎・狩生地区には風化されつつある石塔が多く残されている。